



花鳥餘情
九



第廿五

才廿六

才廿七

陽
推本
字治

總角

早
寄
生



僧正慈海

花鳥餘情第廿五

宇治

橋姫

椎下



宇治巻

或抄云此物語のむかしつりやうのおくち若狭守は
 平中頼朝の武部は頼朝の御前を思ふや或人
 のりゆりの宇治十指の娘大貳三位は是れは
 極ありけり也とゆふも侍の班麿の史記に
 ありけりゆけりの子班固よりつらきありあは
 しけり
大貳三位は平中頼朝の御前也女御三任は
 申す宇治八幡大菩薩の御前也御前は清子の
實子後一條院の乳母三任は
 大貳三位の御前也御前は大荒道稚子と
 申す又よりつらきわきよと申す御前は
 御前也御前は御前也御前也御前也御前也

うのらみとあれたり一海一まきれ(波)
信りつせらふま体(波)してわき(波)のま(波)とら(波)
多(波)ま(波)ら(波)く(波)信(波)り(波)く(波)大(波)き(波)の(波)ら(波)に(波)や
信(波)り(波)は(波)せ(波)路(波)く(波)ま(波)ま(波)い(波)ら(波)れ(波)我(波)ら(波)の(波)ま(波)り
と(波)も(波)ら(波)く(波)ら(波)ひ(波)ま(波)ま(波)の(波)信(波)り(波)は(波)ち(波)り(波)ま(波)れ(波)
し(波)ら(波)ち(波)子(波)ら(波)の(波)ま(波)ま(波)つ(波)せ(波)路(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)く(波)ら(波)の
路(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ま(波)ら(波)く(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
た(波)り(波)一(波)海(波)一(波)ま(波)ら(波)ら(波)わ(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
し(波)よ(波)ま(波)ら(波)く(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
く(波)ら(波)ら(波)く(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
は(波)か(波)ら(波)く(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
し(波)よ(波)ま(波)ら(波)く(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)

あらら(波)ま(波)ら(波)く(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
三年(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
天下(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
い(波)ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
あ(波)ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
て(波)あ(波)ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
ら(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
ら(波)あ(波)ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)
ら(波)あ(波)ら(波)ら(波)ら(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)の(波)ま(波)ち(波)ら(波)

つてあつて

時 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
とる 院 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
くま ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
あ ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事

と人 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
あ ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
作 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
ま ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
物 あり

他 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
あ ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
物 雄 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
と ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
は ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事
水 ころころと事 ころころと事 ころころと事 ころころと事

思ふところのまゝにせしめたるはなほのまゝに

傳授^傳塞^塞林^林諸^諸唐^唐土^土に翻して迦^迦東^東男^男と云ふ

信^信あり佛^佛の道^道を修^修りて人^人の佛^佛の道^道あり

中^中子^子のまゝのて聖^聖賢^賢の役^役を以^以て角^角年^年廿^廿二^二冊^冊

を以^以てするはわくにありまゝのまゝにわくに

名^名を以^以て松^松のくひに食^食して孔^孔蒼^蒼明^明のの呪^呪

を以^以てはわくに伝^伝はるゝて鬼^鬼神^神のまゝに作^作る

と傳^傳授^授は塞^塞林^林のまゝにわくにわくにわくに

しするはわくにわくに

^{毛布}を以^以てはわくにわくに傳^傳授^授はわくにわくに

を以^以てはわくにわくに傳^傳授^授はわくにわくに

を以^以てはわくにわくに傳^傳授^授はわくにわくに

ありとわくにわくに

く知^知人の物^物のまゝにわくにわくに

を以^以てはわくにわくに傳^傳授^授はわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

人の智^智由^由業^業ありて物^物のまゝにわくにわくにわくに

信^信ありまゝにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

わくにわくにわくにわくにわくにわくにわくに

おぼろげにわづらひてあはれなるもあはれなるもあはれなるも
後女にまじりてあはれなるもあはれなるもあはれなるも
これ海軍の事なりて候なり

あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
招月とてあはれなるもあはれなるもあはれなるも
ふと擧げたりし事とあはれなるもあはれなるもあはれなるも
ふとあはれなるも

あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
野邊の擧げたりし事とあはれなるもあはれなるもあはれなるも
ふとあはれなるもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
陰月の事とあはれなるもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみ

しつとあはれなるもあはれなるもあはれなるも

任者お終。昨春の²²おしりあはれなるもあはれなるもあはれなるも
ゆる事かたしとあはれなるもあはれなるもあはれなるも
うらみあはれなるもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみ

あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも

あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも
あまのうらみもあはれなるもあはれなるもあはれなるも

白雲白根の影をまはるる花の影をまはるる思ふ人の心はなほ
思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
あつた人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
内膳目式を成國道に國水奥細代名上原其の
水奥始九月迄十二月廿日倍しし事あり
の回しありありありありありありありありありあり
こそありありありありありありありありありあり

この花の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
今迄に思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
の形に思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
任吉人明神の宇治の橋下ありありありありありありあり
こころの思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ

ほろろろろ

思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ

郭景詩借同略懸車章知亀鶴年

かきうの思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
平箱の思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ

かきうの思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
は僕なりの思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
あつた人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
舟の思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ
あつた人の心はなほ思ふ人の心はなほ思ふ人の心はなほ

寛永のころに人せしむるは日にもよむに
名はしるしにまの末入名能多に家傳
の事なれどもはまのころに好まむに
いふころの交わ

六条院よりほこりて右にありて
川にわたりに伊といりてありて
流す

河原にたれど耕す所業に治をいり陽成天
のころにころしこころに松とまのころに
とくはつたふもまのころに
兼平はつたふもまのころに
とくはつたふもまのころに

と長徳四年十月乃は清臺開白は院と
ておのころに
ありてまのころに
まのころに
のり治暦三年のり幸ありて
若の志はまのころに
はまのころに
のりありて

かろひのまのころに
まのころに
まのころに
まのころに
まのころに

し業くといふ部らりていふもいふこと
うらにいらりての事なり

いゆりきん
うらにいらりての事なり

大樹即那羅經字大樹即那羅字無量國名魚
量乳無量諸天奏四方四千淨妙樂音未備所
弦款一動声振大千演法王踊没低仰一切屯同
皆從座起猶如舞戲天冠善菩薩同迦葉善妙款
知足乃陀才一乃於今日猶如小兒迦葉不言非本
心也
うらにいらりての事なり

作中かほ事なり

杜詩之驚鳥定却拭淚とありてありてあり

うらにいらりての事なり
物之杜子美の
とありてありてあり

あきねよれ心なりて九月一色ありね

うらにいらりての事なり

黒木のいふいふありてあり

あきねよれ心なりて九月一色ありね
うらにいらりての事なり

り程
いふとてさうもなれば初音よなまゝとてさう度々お祈な

わらうまのいふお祈りさうと

お祈りのお祈りさうと初音の度々わらうと

さうとてお祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

南相如の趙璧さうとてお祈りさうと

さうとてお祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

さうとてお祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

海の花お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈り

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

お祈りの度々お祈りさうと

我身はくさるる事一ははたしむる事

あはれなる事一ははたしむる事

かたき心よせしむる事一ははたしむる事

白文の事一ははたしむる事

ついでに

市をさしむる事一ははたしむる事

白文の事一ははたしむる事

又かたき心よせしむる事一ははたしむる事

ついでに

市をさしむる事一ははたしむる事

白文の事一ははたしむる事

かたき心よせしむる事一ははたしむる事

白文の事一ははたしむる事

又かたき心よせしむる事一ははたしむる事

市をさしむる事一ははたしむる事

白文の事一ははたしむる事

又かたき心よせしむる事一ははたしむる事

市をさしむる事一ははたしむる事

ついでに

中務集高き事一ははたしむる事

市をさしむる事一ははたしむる事

白文の事一ははたしむる事

又かたき心よせしむる事一ははたしむる事

市をさしむる事一ははたしむる事

ついでに...
いふ...
いふ...
いふ...

女乃其をわらふに... 今よれば女胡不申

まの...
まの...

うさ...
うさ...

いふ...
いふ...

いふ...
いふ...

いふ...
いふ...

いふ...
いふ...

いふ...
いふ...

いふ...
いふ...
いふ...
いふ...

花鳥餘情 男女古 今 總角

總角 今

あま...
あま...
あま...
あま...
あま...
あま...
あま...
あま...
あま...
あま...

いかにそなたの御心
いとまに思ふ

年いかにあはれ
の思ふに

松の葉とともたぐはく

樹下集葉のなかりしゆりもあつた

金澤の縁起役行者着藤は衣かきたる食が

花け助保身命廿余年

あつたてのふとよしはせ

あはれそめはのう中を

やむまはりの

あつたてのふとよしはせ 秋好中

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

あつたてのふとよしはせ

早晨

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

純多

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

あはれなる御心

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

一 此の國に在る者よき者あり

あつちのうへに... へん... へん...
へん... へん... へん...
へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...
へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...
へん... へん... へん...

へん... へん... へん...

草子
〓
〓
〓
〓
〓
〓
〓
〓
〓
〓

〓

仲文 〓
〓
〓

〓

〓

〓

〓

〓

〓

〓

〓

〓 仲衣横懸字

〓

〓

〓

〓

〓

〓

帝の系系通曰 若は天白二年道資法師始

造宇治橋 しよ東道照

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

申さるゝちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

十月のちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

ちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちんちん

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written in a fluid, connected style. It appears to be a personal communication, possibly a letter or a note. The handwriting is consistent throughout the page, with some variations in line thickness and spacing. The text is written in a dark ink on aged, slightly yellowed paper. The overall appearance is that of a historical document or a personal letter.

Handwritten text in cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. It appears to be a personal communication, possibly a letter or a note. The handwriting is consistent throughout the page, with some variations in line thickness and spacing. The text is written in a dark ink on aged, slightly yellowed paper. The overall appearance is that of a historical document or a personal letter.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, occupying the left page of the manuscript.

Handwritten text in cursive script, continuing from the left page, occupying the right page of the manuscript.

Handwritten text in cursive script, occupying the left page of the manuscript.

Handwritten text in cursive script, occupying the right page of the manuscript.

我身かゝる事も一に御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども

大和繁瀬

作らばと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども

心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども

二等親兄弟姉妹三月暇廿日拾六

心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども
心ももろもろと申す事も御座り候へども
まゝもろもろと申す事も御座り候へども

おしるし衣の服の事よき事なりと申す
し深服事し

あゆのちりり ちりり事おゆのちりり
ちりり事おゆのちりり事おゆのちりり
ゆりり事

申す事しりり事しりり事しりり事
三条交はしりり事しりり事しりり事
る事しりり事しりり事

しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事

やと今ちりり事しりり事しりり事

中勢集の事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事

波羅密の梵語翻しりり事しりり事

しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事

わらわら事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事

しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事
しりり事しりり事しりり事しりり事

ふりつて侍てやあはるもあまふ邪

朱雀院の女三女とて六条院に嫁ゆは
あてもあつらふはあはるはあまふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ

朱雀院の女三女とて六条院に嫁ゆは
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ

侍りて女三女の女三女とて六条院に嫁ゆは
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ

あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ

あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ
あつらふはあつらふはあつらふ

音らるるにしるるにわかれぬゆゑに
しるるにわかれぬゆゑに
銷日不過暮のけ^詩夜の心付らるるに
りけあくるにわかれぬゆゑに
らけのりあくるにわかれぬゆゑに
たはぬまゝに

わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに

わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに

君詩折一枝春

案あつとらぬにわかれぬゆゑに
延針市集向るにわかれぬゆゑに
結實集りてわかれぬゆゑに
と案女にわかれぬゆゑに
のりよるにわかれぬゆゑに
はるにわかれぬゆゑに
中春にわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
石火にわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに

わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに
わらわの暮のけあくるにわかれぬゆゑに

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

出 宗就産た兵米侍師平の右集の侍師平の相
次加座の打敷段饌吉公初前原初長伴平の盛
酒安基酒巡兩三行吊入の藤中侍女に酒餅安
吉蓋^差是^差主云率客起就列處命飯深賜
陪徒者禄五位三人白單細長各二領袴一具六位有
有官散位四人各同細長二領各官三人白絹各二
上^下錢二万 上^下葉女裝束一身常一の裳唐
衣衣之細長貴女着の物之有別のこれより
三守より初の唐衣の中倍よりよりや要月小宵
月宵月或白或池榴或村濃亦有是是之

りはは又の移りよりあり
西宮抄院文雜申申中法身勅^勅夜行上継奉時

上葉初の家入有上継或る重明初嫁娶
時上継以下錢二万と禄よりより上^上の記より
多り白交入り事とこれより初より
不知是院禪周院のく摘子として上継と見也
一事もあつと移りと御^既覧告く
天へて少行くはとけちるわが邪
多りのく移てと束のきと移り
あつたはと文移れ也と移り
あつたはと移り
この移り
わが移り
わが移り

とていふはしるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたはるるはるる

あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく
あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく

あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく
あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく

あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく
あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく

あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく
あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく

唐棣

あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく
あつたてのうらなひを
かきとらふは
かたじけなく

身あらはらまゝにさしおのりおのりたてまつりて
ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと
あつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

二条院の御下御下にまゝにさしおのりおのりたてまつりて

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらと

⑤ うち初言とていふは けち初言謂誰
人亦と尋

るる海にさしおのりおのりたてまつりて

侍侍の御下御下にまゝにさしおのりおのりたてまつりて

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

ふらふらと

ふらふらとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちとあつちと

大御言清彦治通の後配河内守橘推丸村上皇女保子
内親配法興院能自信盛威子内親作九配在太皇太后顯之
と棄てられたるの例皆心脱履のら或は崩落のら只
くろあまきり流すに在信の天子は女后下り配す
申す事なれども候儀皇女御系姫の所よりあはれ
漢約より其例すあはれきげの尚下りす事なれ
わきまをすてくちゆらわおくりりらひらや
そのはらたきつあはれ一糸のまじりてのたは
一糸のまじりて流すに思ひあまきり
まじりてまじりて流すに思ひあまきり
子徳子あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

物志

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

西宮記云天曆三年四月十日有於飛音舎有有
花宴以好上御侍子立南廂有庭南廂東三
三間卷坐原庭前方面入屏風之拈日廂中
西一藤壺弘徽殿西或五間四拾芥

戶東面東一間障子西面五五八屏風二拈數信
濃廣延中敷磁代五河倚子南簀子敷同
延同簀子中間以東敷疊三戶膏衣中六南
五五人障子其西在清酒具赤漆火灯一口有
黑漆其室同机二前其上在滿心舒令昨金銅抄
件鳥入河清銀淨鈍子一口加土器其室疊取當云
綿南前庭敷計紫端疊四枚其南敷二枚收上人
府作掃部寮令敷軒廊東小庭疊二行西面其
樂所府未刻御出早矣次諸心赤中上須侍臣
着府四信五信北信淨膳具雜時朝臣辛五位右位
自南庭渡西昇置物淨机一其云淨府西檯木
作在木南地締敷物別組等淨折敷四枚五淨机

上淺香折敷沈表以金同之朽葉延唐四羅花文
後敷物在心葉藤花同組束件組折敷一各四加牙
象其室表以系檜表積芳在銀筋助信膳折券二枚
心葉即着有回種生物干物宜挂杯以銀作土器以黃土作
細小了信膳退下給臣下衛重信淨酒銀器雜時羽片
給臣下義方初下二獻餽鈍給臣下大臣奏同召樂
所別當中納書源初長令召系人別由作威令會
系所系入奏調子有奇中五文書置物淨
机置所硬紙給臣下獻題有庭雜時大臣奏准延長例
地下人二兩款奇百庭燦明之款奇了伴尹取文
其臺石其束作清正誦左少將羽成人取雅信
銅片束兼燈地下獻奇者源循藤系兼家灌木

有時時方未と備奇大臣取御製表の公卿侍臣
堪平者奏徐竹大臣初言渡西大臣取御杖源
朝臣取御琴今謔進平奏之延喜中時以琴備之御朝
臣未稱物者授頭等入昇御机琴今出代家彈御
兼家初聽昇御賜禄 初言女裝條中御御信信相
長る長給中各給表又以女裝給
又平乃此ひさのり御あきて下りて去り

天曆三年記のり

御乃此ひさのり御あきて下りて去り 天曆三年大空下

御輔之るる上首

乃乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り

天曆三年南遊藤原下賜之御庭

乃乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り

天曆三年軒廊東段末所在

改去奈院のりひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り
乃乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り
乃乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り

天曆三年大空長捧先皇賜勤子内親等筆信

奏之乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り

筆一面 元貞初 奏之乃此ひさのり御あきて下りて去り

と奏天曆三年のりひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り
相の御女さう 延喜中門中女勤子内親等内丁をさう
乃乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り
の勤子内親等 乃乃此ひさのり御あきて下りて去り 乃乃此ひさのり御あきて下り

まはらう孫ひり申とされお致しう宗院の女三
まのこはまはらう孫ひり申の儀うたはるる
何はよの孫ひり申とされお致しう宗院の女三

あえのちるるるはらう一り申とされお致しう
かへらよのちるるるはらう一り申とされお致しう

又わらうちるるるはらう一り申とされお致しう
又わらうちるるるはらう一り申とされお致しう
わらうちるるるはらう一り申とされお致しう
わらうちるるるはらう一り申とされお致しう
わらうちるるるはらう一り申とされお致しう

天曆三年沈音折敷の牧牧櫃甚重以上黒漆銀
黒漆用者粉乾大有赤漆火貯銀鈍子
寛治六年万寿元年夫馬用瑞瑞瑞出書

行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう
行のちるるるはらう一り申とされお致しう

賜天不爲例

天曆七年十月廿八日菊合或る物と重明賜天
寛治四年四月廿七日塞真中務の具平平親と賜天
寛治四年三月廿五日持政中務の具平親と賜天
寛治四年三月廿五日持政中務の具平親と賜天

平親
二品式部卿
村上天子二品中務御号十種殿
後中書王是也

永祿元年二月十日有朝觀の幸中堂後行天宮
寛弘三年三月四日行幸中堂後行天宮同日
年十二月廿一日行幸中堂後行天宮同日
例之
し案は後万壽元年令信後赤保三年
系極後賜と白河の宮喜三年光明寺抄改永
治元年室町行幸廣苑院右相國未信之
例之
りしとら事は信の院の案一か
るね事之志は心と志事うと也と云
心と志事と云ふは孔子の格言也
ありて志事と云ふは純有實と云ふ
なり永延元年三月廿一日右記之抄改と云
なり

也及る信起座獻湯盃石人信取而鈍子主上信也
不為抄改は同被仰壽言或者云万壽抄改又有各
言とて尋記抄改下庭中拜舞とて抄改の例也
ありて志事と云ふは純有實と云ふ
なり永延元年三月廿一日右記之抄改と云
なり

天宮の殿に坐して信を賜ふなり
信を賜ふなり信を賜ふなり
信を賜ふなり信を賜ふなり
信を賜ふなり信を賜ふなり
信を賜ふなり信を賜ふなり

さしつかへなく作られたり

君はあつたまのまゝに
信濃集延書清時著るる
まはりの好まじき
秀人著原國章

若くは京都のりらるる

おのゝりては

おのゝりては

くはりのまゝに

女はりのまゝに

車はりのまゝに

さしつかへなく

さしつかへなく
のりては

さしつかへなく

并に

さしつかへなく

俗名增島彦市道室秀夏記念

